

編集室から

今年も五月の連休が間近になりました。毎年この時期、地元七尾市では一番の賑わいとなる青柏祭（せいはいくさい）があります。千年ほど前から祭礼が始まり、曳山で名物のか山の登場からも四百年を超える由緒を持っており、その運行は、重要無形民俗文化財でもあります。

今月号の表紙写真と見比べていただきたいのですが、木製の車輪の直径も2mほどで、曳山の高さは12mを超えています。写真では、自動車と、地上の人の背、そして舞台に上がって下をのぞいている子供の背格好からもその大きさを図り知ることができます。

でか山の舞台には、毎年歌舞伎のワンシーンが飾られるのですが、運行が始まってしまうと舞台が高くて良く見えなくなります。そこで、前日5月2日の夕暮れから、街のあちらこちらで、自宅を開放し人形見が行われます。人形宿と呼ばれる開催家では、街路前面の一室を開放して見事に庭園をしつらえ、飾られるのを待つばかりの人形が間近に見られるようにしています。振舞い酒もあり、提灯の朧な光とあわせ、大変風情があります。人形見の宿になるには慶事があったことが前提のようですが、一晩で百万円程にもなる経費負担が重く、近年では公的な場所が増えていることは残念でもあります。

曳山は、翌3日の深夜4日未明から夜を徹して開催され、5日まで続きます。深夜のでか山引き出しは、相当な迫力があり一見の価値あります。特に、勢いがついた山を一発で止める大榎子の命がけの大技。一瞬にして街路の角を曲がる辻回しの技は、只只感嘆するばかりです。

神事祭礼には珍しく、老若男女を問わず山を曳くことができるので、今では全国から祭り好きが集い、この夜ばかりは大勢の曳き手で賑わいます。この青柏祭を皮切りに、お盆過ぎ頃まで能登半島は祭り半島になります。（は）

このニュースは、計画に携わる若手の技術者を育てることを目的に発行を始めました。その後、計画という仕事の内容や、普段、計画マンがどのようなことを考えているのかなどに触れて、少しでも業界を知っていただければと考えて編集しています。



2009/05
(株)アスリック
<http://www.neting.or.jp/usric>

〒920-1167
石川県金沢市もりの里1-149-302

電話 076-233-7217
Fax 076-233-7375
Email usric@neting.or.jp



2009/05
(株)アスリック
<http://www.neting.or.jp/usric>

泉 月



最終飾付直前の青柏祭でか山
by hama

寄稿 『ソーシャルビジネス・スキーマーの仕事』

(株)オフィスオノ代表 **大野 良一**

当地の商工会議所内に設けたプロジェクト名が、「交流型産業創造会議」であり、行きがかり上、その委員長を仰せつかって二年が経過している。

このプロジェクトのスタートが、濱さんとの出会いで、2007年2月当地の掛川商工会議所セミナーにて、濱さんの講演があり、そして、間もなくワーキングチームを発足させ、今日まで続いているプロジェクト名が、その由来である。「交流」と「交流型」との違いであるが、多少、私流に「交流」のみにこだわっていたが、今になってみると、濱さんの言われる「交流型」にして、その後の大変な広がりのあるキーワードになったと感謝の念に耐えない。

もう二年が経過したが、濱さんから学ぶものが、大いにその後の私のソーシャルビジネスとの関わりにサジエストを与えてくれた。

このチームの特徴は、末永く続けるための仕組みを一工夫しているつもりであるが、その第一は、9名の企画委員の年代を六十、五

十、四十台と三世代に亘った構成を心がけたことである。第二は、一ヶ月に一度程度の企画委員会のやり方を出来るだけ、グループディスカッション形式にするため、席順は、いつも会場に来た順にどこに座ってもOKとしたことである。チョットとしてことであるが、なんとなく「ソーシャルビジネス・スキーマー」としての役割が出来たかなと自負している次第である。

とは言うものの、「コーポレートビジネスとソーシャルビジネスの進め方の違いの多くを、ここ数年での体験で学んだ。

即ち、ゴールは同じでも、そこに至るプロセスは、種々あり、画一的ではない。

これからも、地域価値を高めるために、一杯の努力と、報徳精神の根幹である、「経済と道徳」の調和を念頭に取組んでいくつもりであります。



【プロフィール】
(おおの りょういち)
一九四一年横浜生まれ。掛川市在住足掛け三七年。日本大学経営工学部卒。リゾート産業に三十年。大日本報徳社・個人社員。日本空手道連盟五段。

濱のしびせき 『たんかん』

沖縄弁(うちなーぐち)では、兄弟の事をちよーでーと言っ。

五年前に能登で開催した全国地域づくり大会。我が里の分科会に沖縄から参加していただいたSさんとは、いきなり意気投合。ちよーでーと呼び交わす仲間になった。その後家族ぐるみの交流をさせていただいている。そればかりではなく、能登の米と沖縄の泡盛など物々交換也。

やはり、2年ほど前に仕事の一環で訪ねた際、「たんかん」畑に連れて行ってもらった。里山の一角に「たんかん」の木が植えられていた。あまり馴染みが無いかもしれないが、「たんかん」は柑橘類で昔なつかしいミカンに似た味がする。Sさんの果樹園で、ひとしきり摘果体験。木の上の方で太陽の日を浴びたものが美味しいそうだが、鳥が一足先に啄ばんでしまっていた。

そうやって持ち帰った「たんかん」は、家族に大好評。以来我が家では、忘れ得ぬ沖縄の味として定着した。

先月百号を迎えたこのニュースが沖縄に届いた頃、Sさんから電話があった。毎号無償で記事を寄せてくれているしギョウ一陣に「たんかん」を贈りたいと。丁度大きな納品の段取りに追われていた時で、気がせいっていたためだろう。再配達の手間などが脳裏を過ぎり、正直一瞬戸惑ってしまった。正直に伝えると、送付

希望先さえわかれば、沖縄から直送してくれるという。集荷時期のピークを向かえ、連日夫婦で摘果し疲れているだろうに、なんとという有難いお話だろう。

ややあって、我が家にダンボール二箱を連結して一個口にした「たんかん」が届いた。レギュラー陣からも続々と着荷の報が届く。その中の一人からは、百個近くも入っているとのこと。沖縄に御礼の電話をすると、「何を言っているんだ。量なんか気にするな。らしくも無い」との返事。いやはや、本当に恐れ入ってしまった。こんな凄人々々とのご縁に恵まれている我が身の何と有難いことが。

人に感謝の念を抱いて何か御礼をと思っても「こんなことをしては差し出がましいのではないか」と躊躇し、あるいは逆に「そこまでしなくても」と躊躇する。昨年九月号で恩返しの流れについて書かせていただいたが、その自分自身がささやかな感謝の利子もつけずに、様々過ぎてきていることを思い知ることになった。

「たんかん」は、面白い果実だ。皮が黒ずんだ、見てくれの悪いものほど美味しい。これを知らず見栄えの良いものを手に取ると、味は今ひとつの結果を受け取ることになる。見栄え優先の昨今の流通事情とは、真逆の「たんかん」。黒ずんだ「たんかん」を眺めながら、表面優先・議論表層の世情に何か訴えかける果実ではないかと、想つのである。

『 春休みの宿題に思う 』

(株)アスリック プロジェクト推進部 五十嵐 政信

私事で恐縮だが、この春に長男が高校に入学した。そこで驚いたことがある。何と高校入学前の春休み中に、宿題が出るという事を知ったからである。これは何も、ウチの長男が入学した高校に限ったことではないらしい。かなりの数の高校が、入学前の春休みに宿題を出しているという。

宿題は、高校で習う理科と数学の予習で、まだ習ってもいないことを自習して、指定された問題集を解いておくようにということだった。

いつからこう言った事が一般化したのかは知らないが、全くどうなっているんだ?とと思ってしまった。来るべき大学受験に備えて、一瞬たりとも怠けてはいけぬ。緊張感を持って春休みを過ごし、しかるべき準備をしてから入学すべし。と、いうことなんだろう。

宿題の中身をちょっと見たのだが、あれは理科と数学が得意で大好き、という奇特な生徒なら「おんもしれー」と言って喜々として取り組むだろうけど、そうではない一般的な生徒だと「わかんねー」と匙を投げだすような問題も含まれていた。「わかんねー」問題は、入学した後で教えてもらえることになるのだろうが、気になったのは、このやり方では数学と理科が苦手な生徒は、苦手意識に拍車がかかるだろうなと思った事である。

とはいえ、高校の先生方があれこれと色々と考えた上での宿題なので、デメリットだけではなく当然メリットもあるのだろう。というか、そう信じたい。

教育とは一体何だろうか? 大辞泉によると「ある人間を望ましい姿に変化させるために、身心両面にわたって、意図的、計画的に働きかけること。」とある。とするなら、この「望ましい姿」というものが重要で、これが教育の目的となる。ところで、この目的とは一体何なのだろうか? 自分自身も、我が息子にどんな人間になって欲しいと思っているのだろうか。そしてこの手の話を、真剣に息子に対して話したことがあっただろうか。胸に手を当てて考えて、う〜むと唸ってしまった。

「入学前の春休みなのに宿題とは大変だな」とつまらぬ同情話をしたところで意味はない。高校入学時の年齢は15歳。昔で言えば元服だ。とするなら、真剣に将来の人間像について語り合うに足りる年齢ということだ。やや遅きに失した感もあるが、息子と真剣に向き合わないといけぬと言う事に気づけただけ、この宿題というものにはメリットはあったということかもしれない。

でもな〜、こいつがまたぶっきら棒なんだよな。ま、昔の自分を思い出せば同じなんだけどね。

『 TWISTED SENSE 』

合同会社アイアイシー 山田 浩市

先日、近くにオープンしたりサイクルショップへ服を買いにいきました。服を買う⇒福を買う に思えて何か嬉しい気持ちになるので、僕はその行為が好きです。

そこでぱったりと、隣町のヴィンテージギターショップのオヤジと。「最近が良いギターがどこにも無い・・・」とお嘆きの様子、そそくさとお帰りにになりました。帰り際には、中学の同級生ともパツパツ、10年以上変わらない奴です。居酒屋が堅調で、さすが駅前立地。高そうな座敷テーブルを車に積んでいました。

その時の目的は中途半端な季節物の福を探しに。。。半袖着たいのに、寒いし、、、(年を感じます・・・)。長Tの良いのがないかなあ〜と物色してたら。。。発見!

胸のプリントには、こう書いてあります。「TWISTED SENSE OF HUMOR」

そして、背面は「A color is different from from in a way of felling by a looking person」ひねったセンス、日本語にだと良い方にも悪い方にも訳せる厄介な英語。穿った見方も言い方を変えれば「違う視点」、ねじれの位置も見方を変えれば交点。受け取るセンスと出すセンス、の違いもありますが、ある情報をメモリする時・記憶する時にひとつ自分の思いや考え方を加味して残してみる。そうすると、もう一度取り出そうとしたときに何故か、記憶した当時のことをより深く印象的に覚えていることに気が付くことがあります。

求めよさらば与えられん、確かに四六時中そのコトを考えていても降りて来るものはあります。そのもう一方で、「閃き」というジャンルがあって、いつもじゃなく何かお題を与えられた場合に瞬間的にアイデアをもらうことが良くあります。それは、オリジナルな場合もあればアレンジ・リアレンジの場合もあります。

地元のプロサッカーチーム「FC岐阜」さんからお誘いを受け、ホームゲーム開催時の球場屋台村でカレー屋を出させていただくようになりました。12月までのロングランです。昨今、なかなか運営面でも難しいようですが、大勢のサポーターが埋め尽くす日を夢見て応援しています。お手伝いの子達と、たまには変わったメニューも出してみようということになり、夜のゲームとかまだ寒い日もあるので、ミネストローネを作って行きました。結構な渾身作、周りの評判もますます。初めてにしては、売り上げもまあまあ。看板娘がお腹が空いたということで、適当に食べていいよということ、ミネストローネにご飯を入れて食べてます。カレー用にライスはあるので、そこにスープを注いで粉チーズとパセリを。隣のブースの人にブラックペッパーのミルまで貸してもらって、超ご満悦です。

「なんじゃ! そりゃっ!!」ってことで、一口。旨い・・・。

簡単スープリゾット「元祖! ミネストライス」完成。次節の屋台村から試作品始動の運びとなりました。まかないから生れた思いつきメニュー、こんな自由な発想もTWISTED SENSE? 誰と話をする時でもそれは無いだろう、という壁を取り払っています。とりあえず、まずはどんな突拍子も無い事でも頭だけで良いから考えてみる。どうせなら、それを出来るだけ大きくして話を終わろう。

明日は復活なったユニコーンのLIVEです。アリーナ席2列目、しかもど真ん中のチケットをゲット出来ました。求めよさらば与えられん。かれらの超ヒネクレタセンス、を目に焼き付けに行ってきます。

(先月号からつづく)

そして今度は「市の為に、、、君ならできる!」との市長の声。

おだてに弱いこともあって、一肌脱ごうと心に決め、またまた妻の反対を押し切りいざ出陣と思ったら逆風。市長の目論みに議会は理解を示めさない。

逆風だからこそ、風のごとく天高く舞い上がればよい、そうすれば広い世界が見えてくる。苦勞している時こそ、人の心や情がわかるものだ。宿のおやじの鉄則は、決してめげないこと、言い訳しないこと・・・だと思っている。と富岡さんの話が続いた。

役所は内部に入ればかなりの排他性を持っているから、丸腰で役所組織に入り込むと徒勞に終わることもありそうなので、予め地方自治法や地方自治財政のことを勉強したほうがよいと本や定期購読すべき雑誌を紹介させていただいた。すでに勉強は進んでいるらしく、市長の期待に応えるようと意気軒昂だった。今年退職の部長とタッグを組んでの改革ペアということで、新年度からの活躍を大いに期待したい。

かつて旅館は地元から食材、酒を仕入れ、人を雇い、泊まりのお客は地元の店を訪れ、まさに外貨を稼ぎ、地元で金を回す装置として重要な役割を担ってきた。今は安ければどこからだって仕入れる、人だってそうだ。地産地消は食材のことを言うけど、それ以外にも地産地消の思想が欲しいと富岡さんは言う。

旅館は縦に伸び始め巨大化するにつれ、街にあるサービスを建物中に組み込み、いったんチェックインしたお客の消費を館内に押し込めた。海の眺望を売りにする旅館・ホテルは建物を上に伸ばす。かつて鄙壇上にお互いの旅館や別荘からの眺望に気を遣って建築していた行為がそこには見られない。「我さえ儲かれば」を競い合いあったなれの果てが、海辺の温泉場に多く見られる。

「海に見える地に、いまや人気の温泉場は無い」と言い切った黒川温泉のリーダー後藤哲也さんの言葉を思い出す。ウチの売りは「温泉と田舎」だ。温泉に集中し、田舎らしさに徹底的にこだわる後藤さんらしい言葉だ。

4 4 4 4

富岡さんのお話を聞いている途中に、宮城県庁の星さん到着。それぞれに自己紹介をお願いした。ブランド戦略、港湾そして生活保護の仕事に富岡さんはことごとく反応した。港湾は目の前に造られた海水浴場ことに、生活保護は旅館が倒産すると一気に対象者が増えるという話に、流れてくる身寄りの無い従業員のその後など、観光地特有の問題があることを口にされた。

話の後に、お楽しみのイカメンチ、海鮮汁、釜飯をご馳走になっている間に、最後の合流者愛媛県庁の福井さんがそろそろ駅に到着する時間が近くなっていた。

イカメンチは相当にイケル。是非召し上がっていただきたい。店にはパックものも出始めている。干物と合わせてお土産に最適である。



網代駅で福井さんをピックアップして伊東温泉に向かった。川沿いに昭和初期に建てられたかつての老舗旅館がある。それが木造3階建の温泉旅館『東海館』だ。平成9年に廃館後、伊東市に寄贈されたこの旅館は、その数奇屋建築の美を堪能するとともに伊東温泉の観光の歴史や伊東に別荘を構えた文化人の執筆資料が展示されている。温泉もあり入館+入浴で500円はかなりお得だ。



伊豆最初の温泉をこの東海館とした。浴場が二つあるがタイミング悪く小浴場が男用になっていて、5人の男が高密度の浴槽に身を投じた。この距離感が2泊3日の旅を濃密なものにしてくれた。

(次号につづく)